
時空の町のティールーム

さんたろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の町のテイルルーム

【Nコード】

N9770S

【作者名】

さんたろー

【あらすじ】

とある時空間の、とある世界のテイルルームを舞台とした、ほんわかテイストなお話です。紅茶を片手に、ゆっくり読んでいただくと嬉しいです。

第1話 時空の町

時空間。

私達の住む世界を含め、存在しうる全ての世界は、時空間の大きな流れの中に大小様々な泡として浮かんでいる。

泡は大きく発達するものもあれば、流れに飲み込まれて消えていくものもある。

そんな大きな泡の中のとある世界で、一つの物語が始まろうとしていた。

木々が鬱蒼と茂った深い森。

その中を一人の若い女が彷徨っていた。

彼女の年齢は18、栗色の髪は肩にかかる程度。

普段着であったが、靴は履いていない。

彼女は自分が何処にいるのかすらわからなかった。

今から3日前。

彼女の住む小さな町を大きな嵐が襲った。

この世界で起きる嵐とは、時空間のバランスを取るためのものらしい。

そのため、予測することが難しく、嵐の進路にあたる町の住民は避難するしかなかった。

そんな嵐が、深夜、町の近くで発生した。

突然、地響きにも似た大きな音がしたかと思うと、猛烈な風が吹き荒れた。

寝込みを襲われた人々は、為す術が無かった。
人も建物も、全てが嵐に巻き込まれ、時空の狭間へと吸い込まれていく。

彼女も建物とともに吹き飛ばされ、意識を失った。

そして、次に気付いたのが、この森の中だった。

時空の狭間は、世界の様々な場所にその口を開けている。
きつとこの森も、そんな口の一つなのだろう。

しばらく歩くと、少し開けた場所に出た。

そこには、光をたっぷり浴びて大きな赤い果実を実らせた木々が立っていた。

彼女はごくりと唾を飲み込んだ。

3日間、湧水だけで乗り切ってきた彼女にとって、それはあまりにも魅力的な光景であった。

無意識のうちに駆け足となり、果実に飛びついた。

しかし、彼女の願いも虚しく、指がわずかに触れただけで、体は地面へと降りていく。

そこには水たまりがあった。

そして、彼女は吸い込まれるように、その水たまりの中へと沈んでいった。

□ ■ □ □ ■

ふと気付くと、彼女は石畳の上に倒れていた。

先程まであたりを覆っていた木々は一本も無い。

ここはどこだろう？

彼女は立ち上がると、ゆっくりと歩き始めた。

大きな町だが、人の気配が無い。

それどころか、生き物の気配が全く感じられなかった。

そして、とあるものの前で立ち止まる。

それを見て、彼女は自分のいる場所を理解した。

「ここって……遺蹟？」

ぼつりと呟く。

時空間は不安定だ。

その歪みは水溜まりのような形で突如姿を現す。

そして、そこに落ち込むと、時空の狭間に浮かぶ小さな世界へと飛ばされることがある。

かつて、世界の一部であつたものが嵐で引きちぎられた小さな世界。人々はそれを「遺蹟」と呼んだ。

元の世界へ戻るためには、どこかにある、元の世界と繋がる歪みを見つけるしかない。

しかし、それを素人が見つけることは不可能に近かった。

それを証明するかのように、壁に寄り掛かった骸骨が静かにこちらを見つめていた。

ここでおしまいか……。

彼女は骸骨の向かいの道端に座りこむと、石壁を背に静かに目を閉じた。

こんな場所で人生を終えるなんて一度も考えたことは無かったが、不思議と怖さは感じなかった。

今度、生まれ変わったら、平凡な人生を送りたいな。

彼女の願いは、ただそれだけだった。

何だか疲れたな。

そして、彼女は深い眠りへと落ちていった。

それから、どれくらい時間が過ぎたのだろう。

彼女は、とある香りで目覚めた。

「いい香り……」

そう呟いて目を開けると、隣に一人の男が座っているのに気付いた。骸骨ではない。生身の人間だ。

彼の前には携帯用のバーナーが置かれていた。

その上には小さな鍋がかけられている。

私、夢を見てるのかしら？

彼女は思った。

こんな場所に、好き好んで来る人なんているはずが……。

「あ、起きたようだね。散歩してたら、人が倒れていたのびっくりしたよ」

どうやらいるようだ。

「さあ、どうぞー」

鍋からカップに注がれたのは紅茶だった。

彼女はカップを両手で持つと、ゆっくりと口をつけた。

それは、不思議な味だった。

まずくは無いが、決して美味しいとも言えない。
なのに、心が温かくなっていく。
絶望が希望へと変わっていく。

「もう大丈夫。それじゃ、元の世界に帰ろうか」

男は笑顔で言った。

「え？ どうやって？」

「それは秘密！」

男はウィンクして笑った。

「それとも、ここに残るかい？」

「あ、か、帰ります！ 連れて行って！」

彼女は慌てて答えた。

「私はメルフィー。助けてくれてありがとう！」

メルフィーは男に連れられ、小さな町にやって来た。

男は何かを要求する訳でもなく、知り合いの宿屋を手配してくれた。
翌日から、メルフィーは精力的に町を歩いて回った。

彼女の住む世界では、『都市』と呼ばれる大きな街を中心とした五つの世界が、それぞれを強力な時空エネルギーを用いて結合していた。

そのエネルギーの通り道を、人々は『回廊』と呼んでいる。

回廊には、その強い時空エネルギーに引き寄せられた遺跡があちこちに付着している。

この町も、かつてはそんな遺跡の一つであり、発見した人々によって再興されたのであった。

町の名はルシエ。

古びた煉瓦造りの建物は落ち着きがあり、メルフィーのお気に入りであった。

かつて、この町に住んでいた人々は、どんな生活をしていたのだろうか？

美味しい料理とかあったのかなあ。

様々な思いを馳せながら、メルフィーは路地を歩く。

「おや、メルフィーちゃん、またお散歩かい？」

「うん。お散歩、好きだから！」

宿屋の前で女将が声をかけた。

彼女のもう一つのお気に入り、暖かく接してくれる町の人達であった。

そして7日後。

メルフィーは男の店にやって来た。

彼はこの店、通称、ティールームと呼ばれる、名もない喫茶店のマスターだった。

彼自身も、名前ではなく『マスター』と呼ばれていた。

「マスター、私、この町に住みたい！」

メルフィーの言葉に、マスターは真顔で尋ねた。

「ここは、見てのとおり、何も無い遺跡の町だ。それでもいいのかい？」

「うん。この町には、私が生まれ育った街とは違った温もりを感じるの。」

それに、この町なら、もう一度自分を見つめ直すことが出来そうだから……」

その言葉を聞いて、マスターは笑顔で頷いた。

「わかった。それでは町長に伝えよう」

「ありがとうございます！ あ、もう一つ我儘を言っていていいですか？」

メルフィーは上目遣いにマスターを見た。

「いいよ。何だい？」

「私をティールームで働かせてください！」

マスターは今度は驚いた顔をした。

「見てのとおり、客の来ない店だからね。たいした給料は払えないよ？」

それなら、飯屋で働いた方が……」

「お給料は小遣い程度でいいです。その代わり、下宿させてください！」

炊事、洗濯、何でもやります！」

畳み掛けてくるメルフィーに、マスターは苦笑した。

この子は、思い立ったら引き下がない性格のようだ。

「わかった。それでは、こうしよう」

マスターは提案した。

「君に新たな夢が見つかるまで、ここで働きなさい」

「新たな夢？」

「そう。世界は君が思っている以上に広く、そしてたくさんの魅力に溢れている。

この町でいろんなことを学んで、再び旅立ちなさい」

メルフィーはマスターの表情を伺う。

この人は、少なくとも自分を厄介払いしたい訳じゃない。

それだけはわかった。

今はそれでいい。

考えても結論は出ないから……。

「はい、わかりました！」

メルフィーは笑顔で答えた。

「私が新たな夢を見つけるまで、ここでお世話になります！」

「あれから1年かぁ」

メルフィーはカウンターに頬杖をつき、ぼんやりと外を眺めた。
夕日の差し込む店内には誰もいない。

古ぼけた時計が静かに時を刻んでいく。

カラン、カラン。

店のドアを開ける音がした。

「ただいま。留守番ご苦労さま！」

「あ、マスター、おかえりなさい」

荷物を抱えてマスターが入ってきた。

「どうしたんだい？　ぼーっとして」

「あのね！」

マスターの問いに、メルフィーは柔らかな笑みを浮かべて語った。

「あれからもう1年……早いものだね。何か見つかったかい？」

あのとと同じ笑顔でマスターが尋ねる。

「新たな夢はまだ見つからないけど、新しい発見があったよ！」

メルフィーは、とびっきりの笑顔で答えた。

「いつも笑顔でいられるって、素敵だね！」

第1話 時空の町（後書き）

こんにちは。さんたろーです。

ティールームを読んで下さった皆さん、ありがとうございます！

いつかは、このサイトに投稿しようと思っていて、やっと実現できました。

世の中、暗い話題ばかりなので、この作品でほんわかさせて下さい！

ただし、投稿ペースは亀並み（笑）なので、気長に待って下さいね！
それでは、第2話でお会いしましょう！

第2話 ドロッパー

「おじさん、いつものやつ、ちょうだい！」

「お、メルフィー、お使いご苦労さま！」

雑貨屋の主人は店の奥に入ると、様々な品が詰め込まれた大きな袋を一つ持ってきた。

メルフィーは代金を払うと袋を持ち上げた。

両手にずしりと重みが伝わる。

「お、重い……」

「メルフィー、悪いことは言わないから、マスターに手伝ってもらいなよ」

「そ、それは駄目！」

メルフィーは主人の提案を拒否した。

「だって、居候なのにちゃんとお給料をもらってるんだもん。これくらい、何てことない！」

メルフィーは息を整えると、再び袋を持ち上げ、肩に背負った。主人がドアを開ける。

「それじゃ、気を付けてな！」

メルフィーは右に左にふらふらしながら店を後にした。

「あの頑固さは、マスター以上だな」

主人は見送りながら苦笑した。

この町、ルシエは小さいとはいえ、自給自足できる最低限の機能を持っていた。

都市を結ぶ回廊沿いに存在する町は、回廊が発する強力なエネルギーによって引き寄せられた小さな泡（世界）である。それらは物理的に繋ぎ止められているわけではない。

よって、いつ回廊から切り離されるかわからない。

実際、嵐が通り過ぎた後、忽然と姿を消す町も多かった。

それでも、人々は町を離れようとしなかった。

いや、離れられないのだ。

何故なら、彼らのほとんどは、都市を追われ、行くあてのないドロップパーだから……。

ドロップパーとは、成功を夢見て都市を目指し、そして夢破れた者達の蔑称であった。

「よいしょっと。少し休憩！」

町の大通り（といっても実際は小さな通りだが……）に出たメルフィーは、袋を置き、道端のベンチに腰を降ろした。

回廊は、基本的に町の端を通っている。

よって、そのままでは町に立ち寄る者も少なく、町に利益がもたらされない。

そこで、人々は回廊に脇道を設け、町の中心部を通るように誘導していた。

ただし、そこを通る、通らないは旅人の自由。

努力の甲斐無く寂れていく町は、その小世界の活力にも影響を及ぼ

す。

徐々に力を失い、人知れず回廊から離れ、最後は時空の波間に消えていく。

これもまた、この世界の自然の摂理であつた。

通り過ぎていく旅人達をぼんやりと眺めていたメルフィーは、とぼとぼと町へ入つてくる中年の男に気付いた。

憔悴したその姿は、まさにドロツパーそのものである。そして、通りの向かい側の縁石にどさりと座り込んだ。虚ろな目は、石畳をただ見ているだけ……。

メルフィーは立ち上がると、男へと近づいていった。その気配に気付き、男は顔を上げた。

「お疲れですね。美味しい紅茶でもいかがですか？」

メルフィーは柔らかな笑顔で言つた。

男は怪訝な顔でメルフィーを見る。

その笑顔は、嘘偽りを微塵も感じさせなかった。

「そうだね。案内してもらえるかな？」

「はい！ でも、ちよつと待ってくださいね！」

メルフィーはそう言つと、袋へと駆け寄つた。

「よいしょつと！ さ、さあ、行きましょう」

面白い子だ。

ふらふら歩くメルフィーを見て、男は少し笑みを浮かべた。そして立ち上がると、メルフィーの袋を取り上げた。

「私が持とう」

「あ、だ、大丈夫ですよ！」

「早く紅茶を味わいたくなっただけね」

「すいません！ それじゃ、美味しいクッキーをサービスしますね
！」

メルフィーは礼を言うと、男をティールームへと案内した。

カラン、カラン。

「マスター、ただいま！」

「おかえり。おや、そちらの方は？」

マスターは、メルフィーの背後の男に気づいて言った。

「お客さんだよ！」

「彼女に誘われましてね。ティールームの客引きって初めてですよ」
「なるほど……」

マスターはメルフィーの意図を理解した。

そして、笑顔で答えた。

「かなりお疲れのようですね。取って置きの紅茶をご用意しましょう」

「あ、『めるふいーず』はサービスね！ 荷物持ってくれたから」
「かしこまりました」

マスターは軽く一礼して答えると、棚から紅茶の小瓶を取り出した。メルフィーは冷蔵庫からクッキーの生地を取り出し、オーブンに入れた。

男は窓際の席に座った。

柔らかな日差しが店内に差し込む。

三人だけの店内に、掛け時計の振り子の音が静かに響く。

「はい、お待たせしました」

トレイを抱えたメルフィーが席にやって来た。

木製のトレイには、ティーポットとカップと皿、そして焼きたてのクッキーが入ったバスケットが乗っていた。

メルフィーはカップと皿をテーブルに並べた。

そして、ティーポットを取ると、カップへと静かに注いだ。

「この紅茶は、クロノス・フレーバーっていうの。ここでしか味わえない、とっておきの紅茶よ！」

そして、バスケットの中からクッキーを取り出し、皿に並べた。

「この『めるふいーず』も、とっておきの逸品！」

メルフィーはウィンクした。

「めるふいーず？」

男は首を傾げた。

「私のおばあちゃん直伝のクッキーよ。甘くて、食べると元気いっ

ぱいになるんだから！

マスターに名前をつけなさいって言われたから、勢いでつけちゃった！

さあ、召し上がれ！」

男は頷くと、カップに手にした。

その深い香りは、沈んでいた男の心に優しく広がっていった。

そして、カップに口をつけ、ゆっくりと紅茶を喉に流し込む。

急に体の中から元気が湧き出したような気がして、男は驚てメルフィーを見た。

メルフィーは変わらず優しい笑顔で男を見ていた。
続いて、クッキーを一口。

「うまい！」

その言葉を聞いた途端、メルフィーが満面笑顔になった。

程なく、紅茶とクッキーは空になった。

「ごちそうさま。こんなに美味しくて、元氣の出る紅茶とクッキーは初めてだ」

男は感嘆した。

「特に、この紅茶。消えかけた心の炎を再び燃え上がらせてくれるようだった。

よければ、分けてもらえるかな？」

「ごめんなさい。それは駄目なんです」

メルフィーは申し訳なさそうに言った。

「入荷が気まぐれなので、いつも在庫がぎりぎりなんです。お店で出すのが精一杯で……」

「そうですか……」

男は残念そうに言った。

「それにしても、何故、こんな場所にお店を？」
「え？」

メルフィーは首を傾げた。

「表通りに店を構えたら、もっと客が入るでしょう。こんなに美味しいのに、もったいないかと……」
「それでいいですよ！」

メルフィーは笑顔で答えた。

「ここは都市とは比べものにならないくらい、物価が安いんです。お金で困ることはありません。それに……」

メルフィーは窓の外に目を移した。子供達が笑顔で駆けていくのが見える。

「この町には優しさが溢れてるんです。
そんな町を眺めながら、ゆっくりと流れる時間を感じるって、素敵ですよ！」

そう言って、メルフィーはマスターを見た。

マスターは笑顔で一つ頷いた。

男は思った。

世界は一つでは無く、そこに住む人々も一人として同じ者はいない。自分は管理された世界に長年居て、思考が硬直していたのかも知れない。

そして、男は語った。

「私は長年、都市に住んでいました。

都市に住む人々は、回廊の町はドロツパー達が作り上げた、住むに値しない町だと思っています。私もそうでした」

男の言葉を、メルフィーとマスターは穏やかな表情で聞いた。

「あなた方が私に声をかけてくれなければ、これからずっと、そう思っていたでしょう。

でも、今日、あなたたちのような人もいることに気付くことが出来ました。

そして、管理された都市よりも、もっと魅力的な何かがこの世界にはあることも……」

そして、男は立ち上がった。

そこには、店に入ったときの虚ろな姿は無かった。

「夢を叶えようという、強い思いがあれば、きっと立ち直ることができる。

そう思えてきました」

男の言葉に、メルフィーは満面の笑みで答えた。

「そうですね。次はきつと素敵な夢が追えますよ!」

男は頷くと、テーブルに代金を置いた。

「とても有意義な時間を過ごせました。それでは、私は出発するでしょう」

メルフィーは扉を開け、男を見送った。

「行つてらっしゃい!」

メルフィーの言葉に、男は笑顔で頷いた。

そのとき、ふと何かを思い出したような顔をして、メルフィーに尋ねた。

「そういえば、以前、こんな噂を聞いたことがあります。

とある小さな町に、心を癒す不思議な紅茶を出してくれるティールームがあるとか……。

もしかしたら、ここが?」

男の問いに、メルフィーは、いたずらっ子のような眼差しで答えた。

「さあ、どうでしょう?」

男は大通りへ戻ると、再び回廊へと歩を進めようとした。

そのとき、背後から自分を呼ぶ声が聞こえ、男は立ち止まった。

振り返ると、そこには20代半ばの男が荒い息を吐きながら立っていた。

その顔には見覚えがあった。

「こんな所まで、何をしに来たのかね？　コーウエル君」

男は穏やかな表情でコーウエルに尋ねた。

「わ、私はミリアム・シティの管理者、ソルフォン様の公設秘書官です！　それが理由ではないかもしれませんか？」

「私は既に管理者の地位を剥奪され、都市を追放された身だ。君には何もしてやれん。ミリアムに帰りなさい」

そう言つて、ソルフォンはコーウエルを諭した。

都市の管理者は、その世界においては支配者である。

古の時代、それぞれが独立した世界であつた頃は王国を名乗つていた。

しかし、とある事情で5つの世界が結合された際、国家も連合体へと変化した。

そして、いつからか、その中心となる街を都市と呼ぶようになった。

ソルフォンは、一月前迄は『商都』と呼ばれる都市、ミリアム・シティの管理者であつた。

他の都市が王国時代からの世襲制を維持していたのに対し、ミリアム・シティは商都としての発展を優先した。

このため、管理者は公選にて選ばれ、3年間の任期が与えられる。ソルフォンは有能な管理者としての評価が高く、既に3期目に入っていた。

しかし、とある汚職事件を発端として、一人の男が彗星のように政界に現れた。

彼は、この事件の首謀者をソルフォンであると公言し、議会にて追及を始めた。

当初は誰も信じようとはしなかった。

実際、それは一役人の個人的な犯行であつたから……。

しかし、彼の言葉は、歴代の管理者の誰よりも饒舌であり、雄弁であつた。

周到な根回し、そして将来の保障をちらつかせ、ソルフォンの支持者を次々と寝返らせた。

世論は反ソルフォンに傾き、ついには、議会でソルフォンの管理者剥奪と都市追放が賛成多数で可決された。

そして、男は市民の熱狂的な支持を受け、管理者の座を得た。

徹底的に打ちのめされたソルフォンは、資産を全て没収され、嘲笑う門番達に見送られて都市を後にしたのだった。

都市を出た直後は、生ける屍同然だった。

それなのに、今、どうしてこんなに落ち着いて語れるのだろうか？
ソルフォンは思った。

そうか……あの紅茶か。

たかが、紅茶一杯。

だが、あの娘が声をかけてくれなければ、あの紅茶を味わうことも無く、どこかで行き倒れていたかもしれない。

これも、また何かの縁。ならば……。

「嫌です！ 私はソルフォン様だったからこそ、秘書官に志願したのです。」

力づくで管理者の座を奪うような奴には従えません！」

頑なな表情で、コーウエルは訴える。

この真つ直ぐな性格が気に入って、この若者を登用したのだが、それが災いしたか……。

ソルフォンは苦笑し、そして決心した。

「何度も言うが、私はミリアムには戻らん」

「そんな……」

コーウエルは、がくりと肩を落とした。

その肩に、ソルフォンは手を置いて言った。

「このまま田舎で隠居生活のつもりだったが、気が変わった。

とある街に、旧知の友がいる。

一旦、そこに身を寄せて、事業を立ち上げようと思うが、力を貸してもらえるかな？」

「え？」

コーウエルは驚き、目を見開いた。

そして、その表情が一気に笑顔へと変わった。

「は、はい、喜んで！ ソルフォン様の行くところなら、何処へでも！」

「ソルフォン様は止めてくれ。堅苦しくていかん」

「す、すいません！ それでは、ソルフォンさん、よろしく願います！」

深々と頭を下げるコーウエルの肩を、ソルフォンは優しく叩いた。

「こちらこそ、よろしく頼むよ」

そして、二人は回廊へと旅立っていった。

□ ■ □ ■

そんな二人を、メルフィーは建物の影からじっと見つめていた。

「どうやら、大丈夫みたいね」

ぽつりと呟く。

「そのようだね」

「わっ」

いきなり背後から声がして、メルフィーは飛び上がりそうになった。いつの間にか、マスターが背後に立っていた。

「な、な、何で、こんなところにいるんですか！」

「飯屋に行く途中で、偶然見かけたものでね」

マスターの言葉に応えるように、メルフィーのお腹が鳴った。

「あっ……」

思わず赤面するメルフィー。

「食いしん坊のメルフィーが夕食も忘れて見ているなんて、どうしたのかなと思ってね」

「も、もう、いじめないで下さい！ 今日、美味しいものをご馳

走してもらいますからね！」

そう言うと、メルフィーは飯屋へと駆けていった。
その後を、マスターはいつもの笑顔で追った。

第2話 ドロッパー（後書き）

皆さん、こんにちは。

ティールーム第2話、いかがだったでしょうか？

メルフィーのほんわかパワー（笑）は届きましたか？

この作品を読んで、笑顔になっていただけると嬉しいなと思います。

第3話　フィリア

時空間には、大小無数の泡（世界）が流れている。

そして、泡の中心には時空エネルギーが集中する。

そこには、泉や大木など、その世界を象徴するものが存在する。

人々はそれらを監視することで、自らの世界の状態を把握していた。

ルシエの中心には直径10メートル程の泉があった。

その湧水は、町の人々に癒しと活力をもたらしていた。

午前8時。

大きなタンクを背負ってメルフィーがやって来た。

これも開店前の仕事である。

泉の傍に置いてあるひしゃくで水を汲み、タンクへと移していく。

「ふう、これくらいでいいかな？」

メルフィーはタンクが一杯になったのを確認すると、蓋を閉めた。

そして、ひしゃくの水を一口。

冷たい水が喉を流れていく。

「うん、今日も美味しい！」

満足そうに頷くと、タンクを背負った。

「お、重い……」

当たり前だが、タンク一杯に入れられた水はかなり重い。

タンクに取り付けたバンドが、ずしりと肩に食い込む。

「おや、メルフィーちゃん、大丈夫かい？」

入れ違いに水汲みに来たのは飯屋の女将だった。

「お、おばちゃん、おはよ……」

挨拶をする声も辛そうだ。

「水汲みくらい、マスターにしてもらったらどうだい？ 居候だからって、そんなに気を使わなくてもいいのに」

「こ、これくらい、だ、大丈夫……」

空意地を張るメルフィーに、女将は溜息を吐いた。

「難儀だねえ。ま、無理はしちゃだめだよ！」

「あ、ありがとう」

そう言うと、メルフィーはふらふらと町の中へと歩いていった。

「さて、私もさっさと戻らないと」

女将は、両手に持っていた大きなタンク - メルフィーが持っていたものを2つ - 一杯に水を注ぐと、軽々と持ち上げて店へと帰っていった。

「よいしょ。あと少し！」

額に汗を浮かべ、メルフィーが街路を曲がろうとしたそのとき、曲

がり角の向こうから誰かが飛び出した。

「キャッ！」

避けることもできず、衝突したメルフィーは、その場に転んだ。ぶつかった相手も派手に転んでいく。

「いたたた……」

メルフィーは腰をさすりながらその方向を見た。衝突した相手は女だった。

赤いジャケットにタイトスカート、金髪のロングヘア。

「いったーい！ もう、ちゃんと前を見てよね！」

自分のことを棚に上げて文句を言う女に、メルフィーは見覚えがあった。

「それはお互い様です、フィリアさん！」

そのフィリアは、メルフィーを指差して言った。

「あー！ 出たわね、ほわほわ娘！」

「ほわほわ娘じゃありません！ メルフィーです！ フィリアさんこそ、ちゃんと前を見てください！」

メルフィーは抗議するが、フィリアはさらりと受け流す。

「ふん、今日のところは許してあげるわ。で、マスターはいるの？」
「うん」

その返事に、フィリアから不機嫌な表情が一気に吹き飛んだ。

「あ、そう。それじゃ、先に行ってるわね!」

そう言うと、軽やかなステップで店の方へと去っていった。

メルフィーはため息を吐くと、タンクを背負い直して、ふらふらとその後を追った。

カラン、カラン。

「おかえり。ご苦労さま!」

カウンターの向こうから、マスターが笑顔で迎えた。
その向かいの席には、既にフィリアが陣取っている。
マスターは書類に何やら書き込み、フィリアへ渡した。

「はい、今回の注文書」

「毎度ありがとうございます!」

フィリアは満面笑顔で注文書を受け取ると、大きな胸に抱き締めた。
メルフィーは無言で自分の胸を見る。

こればかりは努力しても埋められないものである。

無意味に胸が大きくても……。

そこまで考えて、止めた。

「マスター、先月の売り上げ、一番になっちゃった!」

「システイリア商会で一番か。それはすごいね」

マスターに褒められ、舞い上がるフィリア。

システiria商会とは、ミリアム・シティに本店を構える老舗の総合商社である。

その品揃えは、子供用品から遺蹟のお宝まで幅広い。

取り扱っていない商品を挙げるほうが難しいとまで言われている。

フィリアの年齢は21歳。

18歳で入社したらしいので、まだ3年目である。

競争の激しい商社で一番とは、確かにすごいことではある。

だが、メルフィーは、顧客の半分はあの胸に魅せられたに違いない
と思っている。

更に、可愛い系の美人とくれば千客万来だろう。

天が誤って二物を与えてしまった典型例だ。

しかし、そんなフィリアの猛烈なアタックにもマスターは全く動じない。

いつもの笑顔でさらりとかわしてしまう。

毎回繰り返される光景。

それでも諦めずにアタックするフィリアの情熱も大したものである。

そのとき、フィリアのバッグの中から電話の呼び出し音が聞こえた。

「フィリアさん、電話鳴ってるよ」

「いいわよ、後で確認するから」

そう言って再び会話に戻るが、呼び出し音は止まる気配が無い。
そして5分後。

「もう、うるさいわね!」

鳴り止まない電話にしぶれを切らしたフィリアは、ようやくバッグから電話を取り出した。

この世界では都市間に電話線を敷くことはできない。

回廊が不安定であるため、突然、ケーブルが切れてしまうのだ。

そのため、ケーブルが不要な無線通信が発達している。

とはいえ、携帯用の小型無線電話は高嶺の花だった。

この電話も会社の備品であろつ。

「もしもし、どなた？」

不機嫌な声で電話に出るフィリア。

そして、その表情が一気に固まっていく。

「サ、サリファさん？ す、すみません！

朝一で客先と商談だったので……はい、すぐに戻ります！」

電話を切ったフィリアは大きなため息を吐いた。

ちなみに、サリファというのはフィリアの上司だ。

しかし、5分も呼び出し続けるとは、上司も見上げた根性である。

「マスター、これから商談らしいので帰ります」

「大変だね。でも、無理をしちゃ駄目だよ」

マスターの言葉に再び笑顔が戻るフィリア。

「私は大丈夫ですよ！ ありがとうございます！」

そう言うと、バッグを手に店を飛び出していった。

彼女が去った後には……。

「あ、注文書！」

メルフィーは慌ててそれを手に取ると、店を飛び出した。そんな二人を、マスターは変わらぬ笑顔で見送った。

ミリアム・シティー1番街。

フィリアの乗ったスクーターは、はオフィス街の大通りへと入った。街は新たな管理者の誕生に沸き、至る所に歓迎の垂れ幕が飾られていた。

私は前の管理者の方がよかったけど……。

フィリアは心の中で思うが、口には出さない。

市民から絶大な信任を得ている今、余計なことを言っていると、その批判は会社へと跳ね返ってくる。

商売人にとって、それは命取りである。

スクーターは、レンガ造りの大きな建物、システィリア商会の前に停まった。

脇にあるガレージへスクーターを置くと、フィリアは通用口へと向かった。

通用口には、年配の守衛が立っていた。

守衛はフィリアの姿を見つけると、大きな声で言った。

「おはよう、フィリア。今日は珍しいな」

「おはようございます。で、何が珍しいんですか？」

「いつもなら、パンを片手に駆け込む時間じゃないか」

その会話を聞いて、クスクスと笑いながら社員らしき女達が通り過ぎていく。

「そ、そんなこと、大声で言わないで下さい!」

フィリアは顔を真っ赤にして訴えた。

「でも、事実は事実です」

扉の奥から声がした。

思わず硬直するフィリア。

出てきたのは、長身で細身の女、サリファだった。

年は30代前半だろうか。

黒髪を後ろで束ね、金色の眼鏡の奥から鋭い視線を浴びせている。

「サ、サリファさんまで、そんなことを……」

「毎日、遅刻ぎりぎり出勤するのは、あなただけよ。言われたくなければ、少しは早く起きる努力をしろ!」

「は、はい……」

先程までの幸せ気分が一気にしぼむ。

「お客さまがお待ちです。早く支度をして行きなさい!」

「はい!」

フィリアは大きな声で答えると、建物の中へと駆けていった。

「いつも思っただが、フィリアに対して厳しすぎないかい?」

フィリアに哀れみの視線を送りながら守衛が言った。

「あの子は鍛えればもっと伸びるわ。いずれは私を越えるでしょう」

その視線を追いながら、サリファは言った。

「難儀な愛情表現だな」

守衛の言葉に、サリファはうつすらと笑みを浮かべた。

カラン、カラン。

「ただいまー」

「渡せたかい？」

マスターの問いにメルフィーは首を横に振った。

「角を曲がるところまではついて行けたんだけど……」

メルフィーは苦笑して言った。

「私が角を曲がったときには影も形も無かったの。フィリアさん、速すぎです！」

「ま、とりあえず、お疲れ様。在庫はあるから、次に来たときに渡すことにするよ」

そう言って、マスターは窓の方を見た。

中年の男が、中を覗き込んでいる。

「さて、お客さんのようだ」
「あっ」

メルフィーはドアを開け、準備中と書かれたプレートを裏返した。
そして、笑顔で言った。

「おはようございます！ ティールームへようこそ！」

第3話　フィリア（後書き）

テイルルム第3話、何とか1ヶ月で書き上げました。

亀ペースのさんたるーにしては、恐ろしく速いペースの更新！（笑）
きっと次回は数ヶ月後でしょう。（おいおい）

今回は、フィリア登場の巻でした。

これから、いろんな場面でメルフィーと絡むことになりますので、
楽しみに！

第4話 時空の冒険者（クロノ・ワンダラー）

薄暗く、雷鳴が轟く丘を五人の男達が彷徨っていた。

「も、もう駄目だ……」

若い男はそう呟くと、崩れ落ちるようにその場に倒れた。

「おい、しっかりしろ！」

リーダー格の男が駆け寄り、抱き起す。

「くそ、何とかならねえのか？」

そう呟き、辺りを見渡す。

その荒野には一本の木すら生えていない。

いや、正しくは生えていたが、世界の萎縮とともに消え去ったのだ。そう、この世界は、まさに今、消滅しようとしていた。

「すみません。俺がミスジャンプしたせいで……」

若い男は全身傷だらけで苦しげに言った。

「あれは事故だ。お前のせいじゃない」

リーダーは迫り来る虚無を睨みながら言った。

「これが冒険者の宿命だ」

この世界の冒険者は、遺蹟探索を生活の糧としていた。
遺蹟は、彼らの住む世界とは切り離された世界。
時空間に浮かぶ泡の一つである。

冒険者たちは、そんな小さな世界を空間転移ジャンプで渡り歩く。
そんな彼らを、人々は『時空の冒険者』と呼んでいた。
クロノ・ワンダラー

しかし、ジャンプは誰にでも出来る訳ではない。
それが出来るのは、『能力を持つ者』だけであった。
それ以外の方法でも、理論的には転移が可能だと言われているが、
成功例の報告はまだ無い。

冒険者達からはマッパーと呼ばれ、ジャンプはマッパーが先導する。
能力者達はまた、世界の周囲に存在する泡の位置を把握マッピングすることが
できた。
彼らがいるからこそ、クロノ・ワンダラーという職業は成り立つの
だ。

時空間は常に不安定であり、時折、ノイズのような振動波が時空間
を走ることがある。

不運にもジャンプ経路で振動波の直撃を受けると、先導者が被害を
被ることになる。

マッパーの負傷はパーティーの運命を左右する。

冒険者達は、常に元の世界に戻れなくなるリスクを背負って時空を
渡り歩くのだ。

彼らは先程、その直撃を受けてしまった。
運悪く滅びゆく世界に『軟着陸』してしまった彼らは、まさに全滅
の危機に瀕していた。

一人、また一人、仲間達が膝を突いていく。

そして、先頭に行くリーダーの前に、大きな岩が立ちはだかった。
もう駄目か……。

リーダーもまた、膝を突いた。

「すごい景色ですねえ」

「滅多に見れるものじゃないからね」

「あ、今日の紅茶も美味しいですう！」

そのとき、あまりにも場違いで呑気な声が聞こえた。

幻聴か……とうとう俺もおしまいのような。

リーダーは苦笑した。

「でも……」

「何だい？」

「何で、こいつがついて来るんですか？」

「こいつって、私にはメルフィーって名前があります！」

いや、幻聴じゃない。この岩の向こうに誰かがいる！

リーダーは、渾身の力を込めて岩をよじ登った。

「わかったわよ。で、居候ちゃんが何で私の邪魔をするのよ！」

「だーからー、私はメルフィーですって！ わかってて言うてる
でしょ、フィリアさん！」

「当たり前でしょ？」

そこには、ティーポットを囲んで座り、大きな声で談笑するメルフィー、フィリア、そしてマスターの姿があった。

ご丁寧に敷物の上に座り、菓子まで用意されている。

それは、まさにピクニックそのものであった。

そして、この会話である。

リーダーは茫然と会話を聞いていた。
何なんだ、こいつら？

「でも、ここ、何でこんなに大きな声じゃないと聞こえないんですか？」

「消えかけている世界はノイズが激しいんだ」

「あ、それでクロノ・ワンダラーは皆声が大きいのか！」

メルフィーはぽんつと手を打った。

「いや、そういう訳じゃないと思うんだけど……」

「あら？」

岩の上からメルフィー達を覗くリーダーに気付いたのはフィリアだった。

「こんにちは。どうしたのですか？」

あまりにも普通の会話に、リーダーは戸惑った。

「あんたら、こんなところで何をしてるんだ？」

リーダーは疑問を口にした。

「商品開発です！」

その問いに、フィリアはさらりと答える。

「商品……開発？」

「ほらあ、やっぱり変なんですよ。だから言ったじゃないですか!」
「だって、普通のツアーじゃ、面白くも何ともないじゃない!」

ツアー? 面白い? 何を言ってるんだ。
リーダーには理解不能だった。

「そんなことは、どうでもいい。あんたはどうやってここへ来て、
どうやって帰るつもりだ?」
「それはですねえ……」

答えようとしたフィリアを、マスターが手で制した。

「それは、ひ・み・つ!」

言いとどまったフィリアの代わりに、メルフィーはウインクして答えた。

「そろそろ時間だよ」
「はい!」

マスターの合図でメルフィーとフィリアは後片付けを始めた。

「あ、そうだ!」

メルフィーは、クッキーの入った袋をリーダーに渡した。

「余ったからあげる! 美味しいよ!」
「あ、ありがとう……」

リーダーは袋からクッキーを取り出すと、口に運んだ。

程よい甘さが、疲れた体を癒してくれる。

「うまい！」

その言葉に、メルフィーは満面笑顔になった。

「仲間達に分けてやってもいいか？」

「もちろん！」

メルフィーは元気な声で答えた。

「それじゃあ、私達は先に帰るね！ さよなら！」

次の瞬間、三人はすうっと消えた。

それをリーダーは笑顔で見送った。

今のは幻だったのか？

しかし、彼の手にはクツキーの袋が残っていた。
ま、それはどうでもいい。

リーダーは岩の上から仲間達を呼んだ。

そして全員を引き上げると、クツキーを配った。

「うまい！」

「何だか元気が出てくるような……」

男達の顔から疲労が消えていく。

不思議なものだ。

リーダーは思った。

たかがクツキーなのに……。

「これ、どうしたのですか？」

「ああ、これは……」

そのとき、マッパーの男が呟いた。

「何だ、あれ？」

全員の視線がマッパーに注がれる。

「おい、どうした？」

「時空間に道が出来ている……」

マッパーは茫然とした顔で言った。

「こんなこと、自然では有り得ない！」

そして、仲間達に言った。

「みんな、帰れるぞ！」

その声には力強さがみなぎっていた。

「時間が無い。早く集まって！」

男達はマッパーのまわりを囲むように手を繋ぐ。

マッパーは目を閉じると精神の集中を始めた。

耐えがたい苦痛を懸命にこらえる。

わずかな時間でいい。飛ばせてくれ！

その願いに応えるように、マッパのまわりに青い光が灯る。それは次第に大きくなり、やがてパーティーを飲み込んだ。

「飛べ！」

マッパが叫んだ。

次の瞬間、光が一際明るく輝いた。

そして、光が消えた後には誰もいなかった。

「あの人達、無事に帰れたかなあ」

紅茶が注がれたカップを手に、メルフィーは呟いた。

「あれだけきちんとした『道』があれば、マッパは気付くよ。きっと大丈夫だろう」

マスターはフィリアのカップに紅茶を注ぎながら言った。

「でも、あんなものを持つてるなんて、マスターって何者なんですか？」

フィリアの突っ込みに、マスターは顔色一つ変えず、いつもの笑顔で答えた。

「遺蹟……いや、他の時空間に普通に飛ばうとしたら、マッパがいないと無理だろう。」

私にはそんな能力は無いからね。あれのおかげで、私の散歩も楽しくなったよ」

どうやら、メルフィー達は、何らかの『装置』を使ってジャンプしたようだった。

「あの機械、見たこともない文字が書いてましたよ。本当に大丈夫なんですか？」

フィリアが心配げに尋ねる。

彼女としては、マスターが危険を冒すなんて、言語道断だった。

「偶然、飛ばされた世界で拾った物だからねえ。実は私も詳しい使い方知らないんだ。

壊れたら大変だね。ハハハ」

どうやら、マスターは、その『装置』を適当に使っているらしい。

「そんな危険なものを使って散歩なんてしないで下さい！」

あまりにも無謀な発言に、フィリアは思わず叫んだ。

「散歩って、あの時もこれを使ってたの？」

あの時とは、メルフィーがマスターに助けられた時のことである。マスターは無言で頷いた。

フィリアと違い、メルフィーはありのままを受け入れているようだ。性格がおおらかなのか、それともおおまかなのか……。

「マスターって、謎が多いのよ」

フィリアはマスターを見つめながら言った。

「どこからやってきたのか、以前は何をしていたのか、だれも知らないの。」

私には、そのミステリアスなところも素敵に感じるのよね!」

そんな真っ正面からのフィリアのアプローチにも、マスターは笑顔を崩さず、ティーポットの手入れをしていた。

や、やはり手強い!

これも試練よ! 頑張れ、フィリア!

フィリアは両手を握りしめ、心の中で叫んだ。

「あー、今日も紅茶が美味しい!」

そんなやり取りを尻目に、メルフィーはカップを手に、幸せそうに言った。

□ ■ □ □ ■

「ここは、何処だ?」

リーダーは呟いた。

男達は小さな町の泉のそばに着地していた。

どうやら無事に帰れたらしい。

マップは気を失っていた。今のジャンプで力を使い果たしたのであろう。

よくやったな!

リーダーは優しい眼差しでマップを讃えた。

「おや、冒険者さんかい？」

中年の恰幅のよい女がタンクに水を注ぎながら言った。

「ここは、何処だ？」

リーダーは女に尋ねた。

「回廊の町、ルシエだよ」

「ルシエ……あのルシエか……」

その名前には聞き覚えがあった。

遺蹟で遭難した冒険者達は、何故かこの地に飛ぶという。

そして、共通するキーワードは、長身の男、そして紅茶……。

そういえば、先程出会った男も……。

「おや、その人、大怪我をしてるじゃないか！

診療所まで案内するから、ついておいで！」

女・飯屋の女将・はマップをひょいと背負うと、町の中へと歩いて行った。

リーダーは上着のポケットに手を入れ、袋を取り出した。

メルフィーから貰ったクッキーだ。

口に入れると、甘味が一気に広がっていく。

ここまで帰れたのは……こいつのおかげだな。

ありがとう、メルフィー。

リーダーは心の中で感謝の言葉を告げると、仲間達に振り返った。

「あ、ちゅ」
「うん」

第4話 時空の冒険者（クロノ・ワンダラー）（後書き）

お待たせしました！ティールーム第4話をお届けします。

冒険物のような刺激が少なく、好き嫌いがはっきり出る作品ですが、メルフィー達のほんわかとした日々が伝わればいいなと思ってます。

更新のペースは…すいません、これ以上のハイペースは無理です！

（笑）

それでは、次回、第5話でお会いしましょう。

第5話 ラスタ

「おばちゃん、お店には冒険者つてよく来るの？」

メルフィーは定食を食べる手を休め、女将に尋ねた。

夕暮れの飯屋。

人通りが少ないルシエの大通りで、唯一、賑わいを見せている。

一階が飯屋で二階が宿という、典型的な街道の飯屋だ。

多少薄暗いが、柔らかなランプの明かりが、料理をより一層美味しく感じさせてくれる。

メルフィーは仕事を終え、マスターより一足先に夕食に訪れていた。

「最近が増えたかねえ。泉に飛ばされてくる人が増えたから……」

先日助けた冒険者達を思い浮べながら、女将は言った。

「あんなに危ない遺蹟を渡り歩いて、怖くないのかなあ」

先日見た、滅びゆく世界を思い浮べながら、メルフィーは言った。

「怖くはないさ」

隣で飲んでいた常連の男が言った。

「冒険は男のロマンだからな。危険も一つのスパイスだよ」

「本当にそうかねえ」

さらに別のテーブルの男が言った。

こちらは10代後半の少年だ。

大皿に山盛りにされた野菜にフォークを突き刺し、これまた大きく口を開けて食べている。

「女将、お代わり！　おい、少年。ここらで見かけない顔だな。冒険者か？」

男は酒を注文して、少年に尋ねた。

「少年はやめてくれ。俺はラストだ。それから、俺は冒険者じゃねえ。ダイバーだ」

ラストはそう言うと、野菜にフォークを立てた。

メルフィーはラストのテーブルを見た。

野菜以外は何もない。

「ダイバー？」

メルフィーは首を傾げた。

「一言で言うと、一匹狼のマップーだな」

女将から酒を受け取りながら、男が言った。

「通常、マップーはどこかのパーティーと組んで冒険の道案内をするのが普通だ。

それに対して、ダイバーは単独で時空間に飛び込んでいく物好きな奴等のことだ」

メルフィーはラストをじっと見て言った。

「ねえ、ラスト」

「あんたは？」

「あ、ごめんなさい。私はメルフィー。この町のティールームで働いてるの」

そう言つて、一礼した。

「それでね。ラストに言いたいことがあるの」

「何だよ」

「お肉も食べないと、大きくなれないよ？」

「うっ……」

突然、胸に刃物を突き立てられたような表情で、ラストはメルフィーを見た。

メルフィーの身長は160。

ラストはどうひいき目に見ても150前半だった。

「お、お前だつて無いじゃねえか！」

ラストはメルフィーを指差して叫んだ。

メルフィーは指差された先を見て……顔を引きつらせた。

「確かに無いわよねえ」

背後から聞こえたとどめを刺す言葉に、メルフィーはテーブルに突っ伏してしまった。

反撃してやりたいが、この手の話題では勝ち目が無い。

「おや、フィリア、こんな時間に来るなんて珍しいわね」

「急にここの特定が食べたくなったの!」

「嬉しいことを言ってくれるじゃない。ちょっと待ってね!」

女将は厨房へ入っていった。

「あら、メルフィー。今日も無いわね」

「どついう意味よ!」

「さあ?」

フィリアはわざとらしく胸を張って言った。

見て見ぬふりをするメルフィー。

フィリアはニヤリと笑うと、隣のテーブル席に座った。

「特定つて、何だ?」

ラストが尋ねた。

「見ればわかるわよ」

メルフィーは突っ伏したまま言った。

暫らくして、女将は大量の料理が乗せられたトレイを両手に持って厨房から現れた。

「はい、特定、お待ち!」

「ふふふ。これよ、このボリユーム!」

満面笑顔でフィリアが歓喜の声を上げる。

全部で10皿。

まるで大食い大会である。

「量が多すぎて、なかなか一人で食べようという人がいないんだよねえ」

女将が笑った。

「それじゃ、いっただっきまーす！」

決してハイペースではないが、休むことなく黙々と食べる、食べる！

「私もたくさん食べるけど、フィリアさんには勝てないわ」

呆れ顔でメルフィーが言った。

「ね、食べたら大きくなるでしょ？」

唯一勝てそうなラストに鬱憤をぶつける。
ちなみにフィリアの身長は170である。

「た、食べりゃあいってもんじゃないだろ！」

反論する声も弱々しい。

そう言っている間にも、皿は一つ、また一つと空いていく。

「ところで、ラストはお肉は食べないの？」

「食べれないわけじゃないんだけど、こっちの肉はどうも口に合わなくて……」

ラストは思い出したように野菜の山にフォークを突き刺した。

「こっちの肉？ ラスタって、どこから来たの？」

「アリスタ」

そう言つて、野菜を食べる。

「アリスタ？」

「マツパーの里だよ」

男が言つた。

「実際、時空を飛ぶ能力を持っているのは、アリスタに縁のある奴等だけなんだ。

きつと、よその世界から渡つてきて居ついたのだろうな」

「よその世界かあ」

男の言葉に、メルフィーは思いを馳せる。

アリスタの人達は、どんな世界に住んでいたのだろうか？

「アリスタは、ただの田舎だ」

ラスタはぶっきらぼうに言つた。

「こんな力があるから、俺達の祖先は迫害され、この世界に移住するしかなかったんだ」

何の能力も持ち合わせていないメルフィーにとっては、どんな能力でもうらやましく思えた。

しかし、ラスタを見ていると、持てる者ゆえの悩みもあるようだ。

どちらが幸せなんだろう？

メルフィーは思つた。

「ところで、この世界はどうなの？ ラスタは好き？」

メルフィーの問いに、ラスタは野菜を一口食べて考えた。

「正直言つて、あまり好きじゃない」

「どうして？」

「本来、一緒にあるべきでない世界を、無理矢理繋ぎ止めているから……」

メルフィーには、ラスタの言っている意味がわからなかった。

「それって、時空炉のことか？」

男の問いに、ラスタは頷いた。

時空炉とは、この世界を構成する五つの世界を繋ぎ止めるために作られた、エネルギー炉である。

「時空炉は大量の時空エネルギーを消費する。」

そのせいで、この世界に接する時空間の流れが複雑になって、周囲の小さな世界を巻き込んでいるんだ。

遺蹟探険ができるのはその産物……いや、副作用だな」
「ねえ、ラスタ。時空炉って何？」

会話が途切れ、全員の視線がメルフィーに集まった。
時空炉の存在は、この世界では常識だったから……。

「お前、本当に知らないのか？」

ラスタが尋ねた。

「うん」

「じゃあ、どこから来たんだよ？」

「それが……わからないの」

メルフィーは寂しげな表情で言った。

「私は小さな町に住んでいたの。あるとき、嵐に巻き込まれて時空の狭間に落ちて……」。

流れ着いた遺蹟で倒れていたのを、マスターが助けてくれたの」

「それって、時空の迷子ってやつだな」

「時空の迷子？」

ラストの言葉に、メルフィーは首を傾げた。

「ああ。俺達ダイバーはこの世界のまわりの時空間をマッピングできる。だから迷子になることは無い。

だが、そうでない人達は、一度迷うと帰る術が無い。お前のようにな。

そんな人達を、俺達は時空の迷子って呼んでいるんだ」

時空の迷子……。

メルフィーは心の中で呟いた。

だとすれば、もう元の世界へ帰ることは出来ないのだろうか？

「何とかして、メルフィーちゃんを元の世界に帰してあげることができないのかい？」

俯くメルフィーの代わりに、女将が尋ねた。

「メルフィー、何か手がかりになるようなキーワードは無いのか？」

ラストの問いに、メルフィーは腕組みをして考えた。

「覚えているのは……リムルという名前だけ」

「家族か？」

「わからない。大切な人だと思うんだけど」

「知らない世界に一人ぼっちは寂しいよねえ」

女将が哀れみの目で言った。

「寂しくないと云ったら嘘になるけど……今はこの生活が大好き！
こんな私でも、ルシエの人達は温かく迎えてくれたから……」

メルフィーは笑顔で答えた。

「あ、思い出した！」

突然、男が手を打って言った。

「アリストっていえば、ムアリスの産地だな」

「ム、ムアリス！？」

男の言葉に、これまで沈黙を保っていたフィリアが敏感に反応した。

「ムアリスっていえば、ムアールの原種って言われる、幻の品種じゃない！」

あんだ、そんなものを食べて育ったの？ うらやましすぎる……」

ちなみに、ムアールはレムリアを主産地とする大型動物。
これまた、肉食派には大人気なのである。

「ム、ムアール……」

ムアールはメルフィーの大好物であった。

「ちょ、ちよつと、メルフィー。よだれ！」
「あつ」

フィリアの言葉で我に帰り、慌てて口を拭うメルフィー。
ラストはようやく勝ち誇った表情を見せた。
傍から見ればどっちもどっちなのだが、当事者からすれば、形勢逆転である。

「ムアールもまあまあいけるが、ムアリスのとろけるような肉は格別だ。
あれを食べ慣れたら、こっちの肉なんて、口に合わなくて当然だよな」

「ムアールよりも美味しいお肉……」

メルフィーの頭の中では、ムアールとムアリスの大群が行進していた。

再びよだれが落ちる。

「負けたな」

男は酒をぐつとあおった。

「完敗ね」

フィリアはフォークに刺した焼き魚を口に運んだ。

「そうそう、ムアリスといえば…」

ラストがさらに畳み掛けようとしたそのとき、ボタンと扉の開く音がした。

入ってきたのは、毛むくじゃらな大男だった。

「お、ラスト、こんなところにいたのか」

大男はラストに用事があるようだ。

ずかずかと中に入り、ラストの前に立った。

「待たせたな。行けるか？」

ラストは皿を見た。

先程まで山盛りだった野菜も、いつの間にかわずかになっていた。それを手早く食べると、代金を置いて席を立ち上がった。

「ごちそうさま」

「仕事かい？」

女将の問い掛けにラストは頷いた。

「じゃあな。何かヒントになるようなものを見かけたら教えてやるよ」

ラストはメルフィーにそう言うと、男の後に続いた。

「ありがとう。ラストも気をつけてね！」

その言葉に、ラストは振り向かず右手を上げて応え、飯屋を後にした。

「さあ、食べましょ！ お腹ぺっこぺこ！」

メルフィーは肉をフォークに刺した。

ちなみに、ムアールではなく、ラフーという赤毛の小型獣の肉だ。脂身の少ない肉は、女性に人気の一品である。

「こら！ それは私のお肉！」

フィリアの抗議に、メルフィーは舌をペロリと出した。

「いったただつきまーす！」

「どこへ行きたい？」

泉のほとりで、ラストは無表情で尋ねた。

「もちろん、お宝が狙える遺蹟だ。その為にあんたを捜し当てたんだ」

大男が言った。

「あんたが見つける遺蹟には、とびっきりの獲物が多いと聞いた」
「報酬は？」

「ああ、前金だそうだな」

「当たり前だ。あんたらが無事に帰る保証は無いからな」

大男は苦笑すると、金が詰まった布袋をラストに投げた。
ラストは受け取ると、中身を改めた。

「あんたの通り名が二つあることも知っている。一つは財宝への案内人、もう一つは…」

「地獄への案内人」

ラストは表情を変えずに言った。

リスクを負う冒険は、常に死と背中合わせである。

通り名は、まさにそんな危険な遺跡へのダイブが可能であることを示していた。

「それだけのリスクを負ってこそ、クロノ・ワンダラーってものだ。俺は自分の運を信じている」

大男は自分に言い聞かせるように言った。

「いいだろう。それじゃ、行くぞ」

ラストの言葉とともに、冒険者達はラストを円形に囲んだ。

それを確認すると、ラストは右手を大きく上げ、宙に円を描いた。

それは光を放ち、ラストと男達を包んでいく。

そして、一つ指を鳴らしすと、一際明るい光が辺りを包み込んだ。

後には何事もなかったように、風が静かに通り過ぎていった。

第5話 ラスタ（後書き）

やっと第5話が投稿できました。

大変お待たせ……されたって思った人はいるでしょうか？

今回はラスタ君、登場の巻でした。

旧作とは違ったラスタを描こうと思って案を練ったらショートしてしまいました。

私は考えすぎない方がいいみたいです。 （笑）

それでは、次回、第6話でお会いしましょう！
え？ いつ投稿するのかって？

すいません、もう眠くなったので寝ますね。

それでは、ごきげんよう…… （笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9770s/>

時空の町のティールーム

2011年11月16日17時54分発行